

原抱一庵訳「ジャンバルジアン」の底本について

梁, 艶
九州大学大学院比較社会文化学府

<https://doi.org/10.15017/24628>

出版情報 : Comparatio. 14, pp.27-36, 2010-12-20. Society of Comparative Cultural Studies,
Graduate School of Social and Cultural Studies, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :



原抱一庵訳『ジャンバルジアン』の底本について

梁 艶

はじめに

原抱一庵（一八六六—一九〇四）は明治期におけるユゴー小説『レ・ミゼラブル』の重要な訳者である。彼が使った底本は英語訳であると指摘されている（注1）。抱一庵訳を検討するに当たり、その底本を確定することは大前提であろう。しかし、『レ・ミゼラブル』の英語訳も何種類があり、抱一庵はいったいどの版本に基づいて訳したのか、まだ判明していない。原抱一庵訳『ジャンバルジアン』は『レ・ミゼラブル』の部分訳であり、中には英語の単語や英語発音に当たる振り仮名などが散在している。特に訳文『水、冥』篇の最後の一段落には英語の原文がつけられている。これは底本を確定するための糸口だろう。本稿では英語の原文及び振り仮名を手掛かりとして、『ジャンバルジアン』の底本を検討していきたいと思う。

一 明治期における『レ・ミゼラブル』の翻訳・翻案

近代日本とユゴーとの出会いは自由民権運動家の板垣退助のユゴー訪問が最初とされる。明治十六（一八八三）年、板垣はフランスから日本に帰るとき、西洋の政治小説、ユゴーの小説や英語

の小説をたくさん持ち帰った。そして、ユゴーの忠告に従って、国民に広く自由民権の思想を普及するために、日本の自由民権系の新聞にユゴーの『九十三年』をはじめとする作品を翻訳・掲載させた。つまり、ユゴーとユゴー作品は最初は極めて政治色の濃いものとなった（注2）。明治二十年代に入ると、これがかなり文学のほうに傾くことになる。徳富蘇峰を中心とする『国民之友』一派のユゴー受容は文学と政治の両面にわたっていた（注3）。この時期になって初めて日本語に翻訳された『レ・ミゼラブル』も稲垣直樹が指摘しているように、一方で文学作品として高く評価されたが、他方でユゴーが『レ・ミゼラブル』の中で刑罰軽減要求の根拠とした「個人に対する社会の罪」という概念が「弱者保護の律法」を目指す運動に利用された。「翻訳王」の森田思軒は日本の文学界に初めてヴィクトル・ユゴーの人道主義を紹介した功労者であり、ユゴーが生涯訴え続けた死刑廃止という重いテーマを扱った作品を紹介した。森田思軒はユゴー作品を精力的に翻訳紹介し、『レ・ミゼラブル』にも早くから関心を寄せ、四十歳になったら翻訳に手をつけたいと周囲に漏らしていた。しかし、それを果たさぬまま病を得て、三十六歳という若さで逝去した。明治三十年代には政治的傾向が弱まり、もっぱらユゴーの文学的側面が衆目を集めるに至る。明治三十五年十月八日から明治三十六年八月二十二日にかけて黒岩涙香が『レ・ミゼラブル』を『噫無情』と題し、『萬朝報』に掲載している。これを象徴として、明治期日本におけるユゴー作品翻訳は絶頂期を迎えたと言える。

明治期における『レ・ミゼラブル』(Les Misérables, 1862) の日

本語訳や翻案は、以下の通りである。

- ・眉嶺山撫（井上勤）訳「寸断分裂／美人之腸」『文学之花』明治二十年十二月
- ・渺茫居士（長沢別天）訳「落魄」『筆之力』明治二十二年六月
- ・採菊散人補綴「配所の月」『やまと新聞』明治二十四年四月、六月十三日
- ・古桐軒主人（田山花袋）翻案「山水家」『千紫万紅』第八号、明治二十五年三月二十五日
- ・原抱一庵訳「ジャンバルジアン」『国民新聞』明治二十五年五月八日、八月二十八日
- ・無名氏（原抱一庵？）訳「哀史の片鱗」『自由新聞』明治二十六年一月十五日、二月二日（注4）
- ・原抱一庵訳「ABC組合」『少年園』明治二十七年十一月三日、明治二十八年四月十八日
- ・福地桜痴翻案「噫浮世」『朝野新聞』明治二十八年十一月
- ・原抱一庵翻案「曉鐘」『太陽』明治二十九年四月
- ・原抱一庵訳「水、冥」篇『文芸倶楽部』第二卷第九編、明治二十九年七月二十五日
- ・福地桜痴翻案「あわれ浮世」『太陽』明治三十年一月、四月
- ・原抱一庵訳「ABC組合」（単行本）（内外出版協会、明治三十五年二月）
- ・黒岩涙香訳「噫無情」『萬朝報』明治三十五年十月（小引八日）九日、明治三十六年八月二十二日

- ・山路愛山訳『懺悔』『民友社』明治三十六年二月
- ・高安月郊訳「浮世之責」『文芸界』明治三十六年六月
- ・黒岩涙香訳「噫無情」（単行本、二冊）（扶桑堂、明治三十九年一月、後編二月刊）
- ・雨絃訳「恋の魔」（「哀史」より）『文庫』明治三十九年四月

明治二十年代における『レ・ミゼラブル』の翻訳はほとんど断片的なものである。その中で、原抱一庵訳は際立っている。原抱一庵は師と仰ぐ森田思軒に劣らず非常に真摯な態度で『レ・ミゼラブル』を翻訳し、部分訳「ジャンバルジアン」、「哀史の片鱗」、「ABC組合」、「水、冥」篇や翻案「曉鐘」を続々と発表した。当時樋口一葉も「ジャンバルジアン」を視野に入れており、「琴の音」という作品の創作も抱一庵訳と関連があると指摘されている（注5）。『水、冥」篇』は「ジャンバルジアン」の中の一節であり、明治二十五年六月十四日『国民新聞』に掲載されただけでなく、『海嘯義捐小説』として明治二十九年七月二十五日『文芸倶楽部』の臨時増刊にも掲げられた。殊に「ABC組合」は明治三十五年内外出版協会によって単行本として出版された。原抱一庵は『早稲田文学』（第九十九号と第百号、明治二十八年十一月）に『哀史』を読む」という文章を寄せ、『レ・ミゼラブル』の内容や登場人物を紹介し、ユゴーの思想や抱一庵の翻訳について述べ、抱一庵自身の感想も語っている。

原抱一庵がユゴーの『レ・ミゼラブル』に興味を持ったのは森田思軒から影響を受けたためだけでなく、福島事件の巻き添えで

未決監に入れられた経験とも関係していると思われる。抱一庵は『哀史』を読む（『早稲田文学』第百号）の最後では以下のように記している（傍線——梁）。

今歳十月郷里に歸省す、郷人諒げて曰く「今年に入りて福島監獄に於て死刑を執行する前後八回、蓋し監獄ありてより未曾有のこと」と

余は端なくユーゴー先生の『造化が一個人に賦したる所のものは願くは社會をして之を成就せしめよ』の句を憶ひ起し慚恨啗に背に汗するのみにあらざりき

感情悲苦ある毎に余は輒ち『哀史』を読む。歸省半月閉戸客と絶ち親む所只だ此の一本のみ。読むこと幾たびにして感恒ねに新たなり。閑窓孤坐思緒のゆくに任かせ漫筆随記して遥かに『早稲田文学』記者に寄す。

ユーゴー文學に就て不肖の見る所何ぞ之に盡きむ。記者若し之を許さば既に半ばを稿脱せる『哀史片鱗』（哀史の抄譯）とともに再び貴紙を讀さんかな。

乙未十月下澣郷里福島に於て 原生 誌す。（注6）

「乙未十月」は明治二十八年十月である。この時期は抱一庵が貧困のどん底に陥り、福島と東京間をしばしば往復していたらしい。当時福島監獄の死刑執行に関心を寄せ、ユーゴーの「社会の罪」と「死刑廃止」の考え方に共鳴していたと見られる。

二 原抱一庵訳「ジャンバルジャン」について

明治二十五年五月八日から八月二十八日にかけて原抱一庵はユーゴー原作の『レ・ミゼラブル』の抄訳「ジャンバルジャン」（注7）を『国民新聞』に連載している。これは「ジャンバルジャン」（明治二十五年五月八日～六月五日）、『水、冥篇』（六月十四日）、『白日行の闇』（六月十九日～七月二十四日）、『断頭台』（八月十四日～八月二十一日）、『僧哲ミリエル』（八月二十八日）で構成されたもので、『レ・ミゼラブル』の第一部「フアンティヌ」の中から一部分を抜き出して訳されたものである。

原抱一庵は『レ・ミゼラブル』を翻訳する際、『水、冥篇』の後『新悲哀』の章次で起る然れども思ふところあり遡りて『白日行の闇』(The night of a day's trunk) ⁽⁴⁴⁾を先づ譯し繼ぐ（注8）というふうに、原文の順序を無視していた。その内容は豊島与志雄訳『レ・ミゼラブル』（岩波書店、一九八七年）と対照すれば、「ジャンバルジャン」は豊島訳の第一部の第二編「墜落」の第六章「ジャン・ヴァルジャン」と第七章「絶望のどん底」に当たり、『水、冥篇』は第八章「海洋と闇夜」に当たり、『白日行の闇』は第一章「終日歩き通した日の夜」に相当する。「断頭台」は第一部第一編「正しき人」の第四章「言葉にふさわしい行ない」の後半部分の内容に当たり、『僧哲ミリエル』は第一部第一編第二章「ミリエル氏ビヤンヴニユ閣下となる」の前半部分に相当する。

「ジャンバルジャン」の掲載が始まる前に、原抱一庵は「題未定」という文章を『国民新聞』に発表した。『哀史』の主人公ジャ

ンバルジアンを紹介し、自分の感想及び『哀史』を翻訳する経緯も述べている。

正直敏明なる一個の男子、有らん限りの手段をつくして一家九口の飢を支えんと苦しみモガくも、有らん限りの手段は今や無となれり、茲に於て渠は少許の麵包を竊めり、之が為めに渠は囚徒となれり。

少なくとも戸数、千を有する市に住する諸君は、必らず此の一個の『渠』を有すべし。

天外に國あり、不幸此の一個の産物を缺く。

諸君にして若し其國に赴くことありとすれば、如何なる言辭を以て諸君は諸君の名産を彼の國人に披露し説明せんとするや。

人情の達人佛國のユゴー先生は叙して下の如く云ふ。

以下記する所の渠とは『哀史』の主人公ジャンバルヂエン
はなり。

しばしば國民新聞社諸兄の懇囑を辱なふして辭さん様なく『哀史』のうちフハンテイーンの篇三章を譯しても其厚意に酬へんと思ひ立ち過ぐる頃より夜な／＼反復熟閱し本夕はしめて筆を染むるの運びに立至れるに國元より久々に母上の上りこさるゝあり思軒居士の所謂幾度見ゆるも新らしき其面に接しては何事の手につくやうもなく曉まで語り明し今し同新聞の廣告を見て始めて驚き呆るゝのみ。今は只た諸兄の寛恕を仰ぐより他に詮なし

後の分は日ならずして差出すべし。三章の中には彼の『破船の人』の章をも單たり。日曜日午前四時老母の枕頭に侍して。抱一庵。(注9)

「題未定」は明治二十五年五月一日(日曜日)に『國民新聞』に掲載された。同年四月三十日に該新聞では「日曜日附録」という欄が設定され、翌日掲載の文章のタイトルと作者を予告している。原抱一庵の「題未定」は一番目に置かれている。右記の引用文にある「同新聞の廣告」とはおそらく「日曜日附録」であろう。

なお、明治二十五年四月二十九日『國民新聞』の廣告では、叢書「少年文学」第十一編村井弦斎著『紀文大尽』の發兌を宣伝していたと同時に、「少年文学目次」も掲げられ、第十二編原抱一庵著『大石良雄』は大文字で強調されていた。

これは意識的にか無意識的にか、読者の注目を引く目的を果たしただろう。訳文を連載しているうちに、原抱一庵も絶えず読者を意識している。明治二十五年七月二十四日「白日行の闇」を訳し終わった後、「余は御身の名を知る、御身の名は『吾兄弟』なり」と云へてジャンバルヂエンを歎ひ迎へたる僧哲ミリエル君次回より現れ出づ、僧哲ミリエル君是れ又哀史中の「巨人なり」(注10)という予告をつけている。読者の興味をそそるためだと考えられる。

明治二十五年五月二十九日に掲載された「ジャンバルジアン」には「一個人に対しての社会の罪」(注11)という表現が見える。また、明治二十五年八月十四日掲載の章「断頭台」の直前に「魔

死刑はユゴー先生畢生の持論より随見録クラウドに於ても之を謂ひ哀史フアンティン篇に於ても之を謂ふ（中略）茲に於て余は僧哲が一個の罪囚と供に斷頭臺に立てる一節を譯出す著者持論の存する所随ふてミリエル君面目の存する所なるべきを思へばなり」（注12）という前書きも見える。これらの箇所から原抱一庵が注目していたのはユゴーが主張した「社会の罪」と「死刑廃止」であると窺えるだろう。

抱一庵は「ジャンバルジアン」の翻訳に当たり、森田思軒の指摘や教えを受けていた。「本篇に筆を進むる當初より余は吾思軒先生に教を乞ふもの多かりき唯だ吾筆未だ足らずして教を受けたる旨を誤り譯せるも尠なからぬなり前々回の如き殊に然り余の懊惱実に堪ふ可らず全篇譯了の後せめては彼の一回のみなりとも更らに改譯するの恵を吾に垂れられんことを余は豫じめ之を切に讀者に乞はざるを得ず」（『国民新聞』明治二十五年五月二十九日）（注13）という翻訳の後記はこのことを語っている。原抱一庵は自分の力の足りなさを自覚し、訳し直すことまで考えていた。彼の真剣な翻訳態度が反映されている。更に、抱一庵は「思軒居士の所謂力足らず興飢へ易すきものか今回は如何にしても筆端窘束して文をなし難し如かず讀者に對する文の短きの罪を自から負ふて餘かに吾文を練磨せんには」（『国民新聞』明治二十五年六月五日）（注14）という後記を通して、読者の期待に添えないことに残念の意を表した。

要するに、「ジャンバルジアン」は、原抱一庵が読者の存在を強く意識しながら、自分なりの選択基準で『レ・ミゼラブル』を抜

粋して翻訳したものである。そもそも抱一庵は全編を翻訳しようと思っていたが、筆が立たなく翻訳能力も足りないため、全編を翻訳し切れず中途半端にやめてしまった。

三 「ジャンバルジアン」の底本について

原抱一庵は「ジャンバルジアン」の「水、冥」篇では、最後の一段落に、その部分に対応する英語の原文もつけ加え、謙虚に読者の教示を願っていた。「茲に原文を挿入せるは世に識者あり吾力の足らざるをアワレみ示教の恵を垂れらるゝの榮あるべきを思へばなり。遺恨なり、吾の學に志す十年晩れたることや」と抱一庵は附記していた（注15）。抱一庵が使った底本を考察する場合、ここにある英語の原文を明治二十五（一八九二）年五月までに出版された『レ・ミゼラブル』の英語訳と比較すれば、確定できるだろう。

ユゴーの『レ・ミゼラブル』は全体で五部仕立てになっている。第一部は一八六二年三月三十日にブリュッセルで出版され、四日遅れて四月三日にパリで出版された。第二部と第三部は同年五月十五日にブリュッセルとパリで同時に出版され、第四部と第五部は同年六月三十日にブリュッセルとパリで同時出版となった。『レ・ミゼラブル』は出版と同時に誰もがびっくりするような爆発的な売れ行きを示した（注16）。英語訳も同年アメリカ版とイギリス版が出た。抱一庵訳「ジャンバルジアン」が出る前の英訳本について、入手できた次の三種の内容を比較した（注17）。

① 翻訳者: Charles E. Wilbour. 出版社: New York: A.L.BURT,

PUBLISHER 出版年月: 一八六二年 (*Les misérables*: a novel by Victor Hugo; translated from the original French by Charles E. Wilbour. Revised and edited by Frederick Mynon Cooper. New York: A.L.BURT, PUBLISHER. June 1862.)

② 翻訳者: Chas. E. Wilbour. 出版社: New York: Carleton, Publisher,

413 Broadway (late RUDD & CARLETON) 出版年月: 一八六四年 (*Les misérables*: a novel by Victor Hugo; translated from the original French, by Chas. E. Wilbour. New York: Carleton, Publisher, 413 Broadway (late RUDD & CARLETON). 1864.)

③ 翻訳者: Isabel F. Hapgood. 出版社: New York: Thomas Y. Crowell & Co. 出版年月: 一八八七 (*Les misérables*: by Victor Hugo; translated from the French by Isabel F. Hapgood. New York: Thomas Y. Crowell & Co. 1887.)

比較の対象となる訳者は Charles E. Wilbour や Isabel F. Hapgood である。Isabel F. Hapgood 訳は一八八七年に出版されたが、Charles E. Wilbour 訳は二つの版本があり、一八六二年に出版されたものと一八六四年に出版されたものである。

原抱一庵は「ジャンバルジアン」では『レ・ミゼラブル』の第一部「ファンテーヌ」の第二編「墜落」の第一回、第七回、第八回と第九回の見出しに英語発音に相当する振り仮名をつけているか、あるいは英語のタイトルをつけている。このことも底本を

確定するための手がかりだと思われる。

【「ジャンバルジアン」】:

- 第一回 『白日行の闇』 (The night of a day's ⁽⁴⁷⁾trank)
- 第七回 『絶望の沈底』
^{デ・ミゼラブル・シネー} ^{ウクトーヌ・ミズ・シネー} (47)
- 第八回 『水、眞』
^{ミゼラブル}
- 第九回 『新悲哀』

【Charles E. Wilbour 訳 (一八六二)】:

- I The Night Of A Day's Tramp
- VII The Depths Of Despair
- VIII The Waters And The Shadow
- IX New Griets

【Chas. E. Wilbour 訳 (一八六四)】:

- I The Night Of A Day's Tramp
- VII The Depths Of Despair
- VIII The Waters And The Shadow
- IX New Griets

【Isabel F. Hapgood 訳 (一八八七)】:

- I The Evening Of A Day Of Walking
- VII The Interior Of Despair
- VIII Billows And Shadows

IX New Troubles

その振り仮名の発音を英語に還元すれば、「ジャンバルジアン」の中の小見出しは Isabel F. Hapgood 訳のとは全然違う。それに対して Charles E. Wilbour 訳のタイトルとは全く一致している。

『水、冥』篇にある英語原文と上記の二つの英語訳の当たる部分を並べて比較すれば、左記のとおりである（囲み線、傍点と太字は筆者による）。

【「水、冥」篇（『国民新聞』明治二十五年六月十四日）】：

Oh, implacable march of human society!

Destruction of men and of souls marking its **path**! Ocean, where fall all that the law lets fall! Ominous disappearance of aid?

Oh moral Death!

The sea is the **inexorable** night **in to** which the penal law casts its victims. The sea is the measureless misery.

The soul drifting in that sea may become a corpse. Who shall restore it **to** life? (注 2)

【「水、冥」篇（『文芸倶楽部』明治二十九年七月）】：

Oh, implacable march of human society!

Destruction of men and of souls marking its **Path**! Ocean, where fall all that the law lets fall!

Ominous disappearance of aid?

Oh, moral Death!

The sea is the **inexorable** night **into** which the penal law casts its victims

The sea is the measureless misery.

The soul drifting in that sea may become a corpse. Who shall restore it **to** life? (注 2)

【Charles E. Wilbour 訳（一八六二）】：

Oh, implacable march of human society! Destruction of men and of souls marking its **path**! Ocean, where fall all that the law lets fall!

Ominous disappearance of aid! Oh, moral death!

The sea is the **inexorable** night into which the penal law casts its victims. The sea is the measureless misery.

The soul drifting in that sea may become a corpse. Who shall restore it to life? (① P.97)

【Charles E. Wilbour 訳（一八六四）】：

O implacable march of human society! Destruction of men and of souls marking its **path**! Ocean, where fall all that the law lets fall!

Ominous disappearance of aid! O moral death!

The sea is the **inexorable** night into which the penal law casts its victims. The sea is the measureless misery.

The soul drifting in that sea may become a corpse. Who shall restore it to life? (② P.60)

【Isabel F. Hapgood 訳（一八八七）】：

Oh, implacable march of human societies! Oh, losses of men and of souls on the way! Ocean into which falls all that the law lets slip! Disastrous absence of help! Oh, moral death!

The sea is the inexorable social night into which the penal laws fling their condemned. The sea is the immensity of wretchedness.

The soul, going down stream in this gulf, may become a corpse. Who shall resuscitate it? (㊦ P.92)

『「水、冥」篇』の英語原文を Isabel F. Hapgood 訳と比べれば、同じ意味を表わす単語に非常な相違があるということは一目瞭然である。原抱一庵は Isabel F. Hapgood 訳に基づいて翻訳していたことはほぼ否定できる。

『国民新聞』に掲載されている『「水、冥」篇』の英語の原文と『文芸倶楽部』に掲載されているその英語の原文と比較すると、『国民新聞』の英語原文には誤植があるということは明らかである。into は into であるはずで、to は to の間違いである。また『文芸倶楽部』の Path は恐らく path のミスプリントであろう。要するに、いずれも英語の原文を入力するとき、誤植が避けられなかった。

上記の『「水、冥」篇』の英語原文の誤植を度外視して、一八六二年版 Charles E. Wilbour 訳と比較した場合、違うところは三つしかない。「c」を「-」、「Oh」を「Oh,」、「Death」を「death」の

違いは入力ミスによると考えられる。inexorable は正しいスペリングであり、『「水、冥」篇』の inexorable は誤植である。つまり、原抱一庵が翻訳するとき使った底本は Charles E. Wilbour 訳であると確定できるだろう。しかし、同じ Charles E. Wilbour 訳であるが、一八六四年版と一八六二年版とは一箇所異なるところがある。O と Oh の違いである。『「水、冥」篇』の英語原文は Oh と書いてあるため、その底本は一八六二年版 Charles E. Wilbour 訳であると判定できるだろう。

結び

原抱一庵はユゴーから「社会の罪」という考え方を学び、森田思軒の文学の影響を受け、『「レ・ミゼラブル」』の部分訳である「ジヤンバルジアン」を原文に忠実に翻訳した。訳文中に付加されている英語の原文を通して、彼が翻訳するときに使った底本は一八六二年版 Charles E. Wilbour 訳であることが判明した。これは基本的な作業であり、原抱一庵のユゴー作品翻訳については今後の課題として残されている。

〔付記〕

一、明治期における『「レ・ミゼラブル」』の翻訳・翻案については「明治翻訳文学年表 ユゴー編」「明治翻訳文学全集」新聞雑誌編 24《ユゴー集1》（大空社、一九九六年）と『「レ・ミゼラ

ブル』翻訳作品年表』『図説翻訳文学総合事典』第四卷（大空社、二〇〇九年十一月）を参照した。

一、引用文は、文意を損なわないかぎり、適宜通用の文字に改め、ルビを省略した。

（注1）稲垣直樹「ユゴーと日本」『図説翻訳文学総合事典』第五卷（大空社、二〇〇九年十一月）、二二三～二二四頁。

（注2）同右、二〇七～二〇八頁。

（注3）同右、二二一頁。

（注4）屋木瑞穂「樋口一葉『琴の音』に関する一考察・ヴィクトル・ユゴー『哀史』との比較を通して」『三重大学日本語学』10、一〇七～一二二頁。その注（8）では、「哀史の片鱗」の訳者は原抱一庵だと推定されている。

（注5）屋木瑞穂「樋口一葉『琴の音』に関する一考察・ヴィクトル・ユゴー『哀史』との比較を通して」『三重大学日本語学』10、一〇七～一二二頁。

（注6）『早稲田文学』第百号、明治二八年十一月、四二～四三頁。

（注7）原抱一庵訳では Jean Valjean の訳として、「ジャンバルヂェン」「ジャンバルジアン」、「ジャンバルジアン」、「ジャンバルジアン」があり、不統一である。ただし、「ジャンバルジアン」は最も多く使われている。

（注8）『ジャンバルジアン』『明治翻訳文学全集《新聞雑誌編》24 ユゴー集I』（大空社、一九九八年）、三九四頁。

（注9）『題未定』『明治翻訳文学全集《新聞雑誌編》24 ユゴー集

I』（大空社、一九九八年）、三七九頁。

（注10）『白日行の闇』『明治翻訳文学全集《新聞雑誌編》24 ユゴー集I』（大空社、一九九八年）、四〇五頁。

（注11）『ジャンバルジアン』『明治翻訳文学全集《新聞雑誌編》24 ユゴー集I』（大空社、一九九八年）、三八七頁。

（注12）『断頭台』『明治翻訳文学全集《新聞雑誌編》24 ユゴー集I』（大空社、一九九八年）、四〇六頁。

（注13）『ジャンバルジアン』『明治翻訳文学全集《新聞雑誌編》24 ユゴー集I』（大空社、一九九八年）、三八九頁。

（注14）『ジャンバルジアン』『明治翻訳文学全集《新聞雑誌編》24 ユゴー集I』（大空社、一九九八年）、三九〇頁。

（注15）『水、冥』篇』『明治翻訳文学全集《新聞雑誌編》24 ユゴー集I』（大空社、一九九八年）、三九三頁。

（注16）稲垣直樹『レ・ミゼラブル』を読みなおす』（白水社、一九九八年七月）、八頁。

（注17）インターネットによると、一八九二年以前には、上記三種以外に、次の二種の英訳が出版されているらしい。ただし、筆者は未見である。

(http://en.wikipedia.org/wiki/Les_Mis%C3%A9rables)

* Translated by Lascelles Wraaxall. London: Hurst and Blackett. October 1862. The first British translation.

* Translator unknown. Richmond, Virginia. 1863. Published by West and Johnston publishers.

（注18）『水、冥』篇』『明治翻訳文学全集《新聞雑誌編》24 ユ

―集Ⅰ―（大空社、一九九八年）、三九三頁。
（注19）『水、冥』篇『明治翻訳文学全集』《新聞雜誌編》25 ユゴ
―集Ⅱ―（大空社、一九九八年）、一二二頁。